

ミクロ文化事象分析と映像実践を通じたこころの学際的研究

宮坂敬造 (慶應義塾大学教授)

■〈こころを写す映像記録〉

本研究では、〈こころを写す映像資料〉および〈精神生態関与資料〉の分析理論を展開しつつ、「相互作用自然事態に現れる〈こころ〉の表現・認知過程把握の手だてとなる、新しい映像手法」の開拓・呈示を目的とした。心的状態に関わる表情、身体所作、言行を映像記録していく場合には、他者との相互作用場面の背景環境に照らしながら映像に定着する作業がまず必要となる。この認識に基づき、本研究では〈こころを写す映像記録〉という新しい概念を設け、こころ研究に役立つ映像系列がもつべき特色を明らかにし、また、そうした学術映像記録の作成条件を検討し、将来行う予定の映像記録制作に役立つ方途とした。

■内部研究会とシンポジウム

そのような映像記録は、ひとまとまりのこころの相互過程、すなわち精神生態単位を最小限一単位含むような映像系列（G・ペイトソンの先行研究を援用拡張）からなっているべきものである。このように考える本研究では、そうした映像系列が組み合わさって感情変化を伴う認知的転位が生じる心的事態に特に注目し、これを「ミクロ文化事象分析」の手法（R・バードウィセルおよびA・シェフレンの先行研究を改訂）と組み合わせて捉える分析方法の開拓を試みた。与えられた予算枠のなかで計2回の内部研究会によってこうした方法論的議論の展開を試み、呪術による病の治療儀礼の調査映像等から怒りや嫉妬等の〈負の感情〉の展開経緯を捉える映像系列事例と参照して検討する方途を討論した。あと2回は、本センター鎌田東二教授主催の「負の感情研究——怨霊から嫉妬まで」との合同開催の機会に恵まれて、シン

ポジウム形式での研究発表を行った。特に、本連携研究代表者が所属する慶大人文グローバルCOE文化人類学班関連の研究会とも呼応し、映像人類学の重鎮であるサウス・カロライナ大学名誉教授カール・ハイダー氏、およびカナダ・トロント大学のジェラルド・カプチック教授の研究発表が本連携研究共催で得られた点で、当初志向した国際レベルでの研究発表にはずみがついた結果となった。

■文化と医療誌に関わる映像

以上が簡略な概要であるが、以下で紙幅の範囲で説明してゆく。

本連携研究で扱う映像記録の内容は、文化と医療誌に関わる映像、すなわち、宗教一医療的場面での憑依の映像記録等の、情意・エトスを表現する映像記録となる。準備的予備研究を前年度に違う題名で実施したが、ここでは、「こころを写す映像記録・表現」の標本抽出的な例となる製作済みの映像記録作品を学術的なものを主として選定、検討評価した（京大関係の蒐集所蔵品も参照し、ロンドンRoyal Anthropological Instituteとドイツ・ゲッティンゲンのIWF研究所所蔵の映像資料等を検討〈宮坂担当〉、ドイツ・Max Plank研究所の動物行動学的映像記録〈大石担当〉）。すなわち、それらの映像資料を、こころを写す系列単位を同定しながら本研究の分析作業枠組みによって分析・検討し、さらに、喜怒哀楽等の生活感情や宗教的憑依等の変性意識や精神症状に関連したこころの状態などを、それがどのような社会的文化的文脈で記録・表現されているのか（たとえば映像人類学での特定の社会でのジェンダー関係の文脈、精神医学的調査や臨床場面での治療者患者関係、トラウマ等の記憶、教育場面における教師

生徒関係など）、その関連に留意して分析整理した。

■〈こころにまつわる精神生態〉

こうした整理をふまえ、本年度は、客観的なこころの状態として映像記録者に捉えられた対象者たちの心的状態を、その所作や行動を通して記録者が映像記録表現する過程を分析する枠組みをさらに精緻化していく作業を進めた。また、映像記録表現者が属する職能集団で伝えられる映像記録表現技法や所与の映像記録機器や技術の変化、現場のわざの運用形態が、その集団や時代・文化によって遷移していく経過にも着目し、「こころを写す映像記録技法」の変遷とそうした映像記録の特色について、50年代から70年代にかけての一部の範囲ではあるが、分析・検討を試みた。

検討の際、ひとつの映像記録作品には複数の系列単位で示される水準とそれらが関連して全体としてあつかうこころの状態という水準がある、という点から出発し、当初は、イメージのインパクトと物語系列から映像系列を捉える認知科学的接近の知見に照らしつつ、ナラティブの理論も参照しながら分析枠組みを整えていった。その過程で、ミクロ文化事象の概念を改訂導入し、〈こころにまつわる精神生態〉という、より深い単位で考察する枠組みを改訂して組み込むことにより、こころを写す映像資料・こころ誌映像資料の的確な把握と分析が可能になる展望をもつに至った。

以上の方法を用いて、アフリカ・カメルーン東部州農耕民の呪術事例（大石・山口担当）、南インドのブータ祭祀とガーナ・アカン族儀礼での憑依事例（石井担当）の映像系列を分析し、冒頭記述のシンポ等での発表に反映させた。